

先天道嶺南道派の展開

——その理念と擔い手を中心に——

はじめに

從來の中國道教史においては、近代の道教はほとんど省みられないか、もしくは、統治者の政治經濟的庇護を失って凋落の道を辿る一方、民間では通俗化が進むという、

「衰退と世俗化」というキイ・ワードで表現されることが多かった。だが、九〇年代以降臺灣や中國大陸で相次いで出版された中國道教の通史や地方道教の概論は、近代時期の道教界に胎動しつつあった新しい動きにも光を投げかけている。たとえば卿希泰主編『中國道教史』第四卷は、全般的な流れとしては、「衰退と世俗化」のパターンを踏襲

志賀市子

しているものの、近代以降著しい經濟發展を遂げた一部の都市や沿海地域においては新たな展開が見られたとして、北京やその他の地域で相次いで興った道教會設立の動きや、陳撝寧など西洋近代思想を意識した近代の道教學者による道教教義の體系化、理論化について詳しく取り上げている（卿希泰主編：二二二—二三三、二八〇—三三六、三七五—四四四）。こうした記述は、佛教界における佛教改革運動や居士林の隆盛と同様、一般に舊弊と見られがちな道教界にも、近代宗教としての道教の確立を模索するさまざまな改革や組織化の動きが起こっていたこと、またそうした新しい動きを擔ったのが主に知識人の在家道教徒であったこと

を示すものとして注目される。

筆者はこれまで香港で「道壇」あるいは「道堂」と呼ばれる道教系扶鸞結社の信仰や活動について研究してきた（志貫一九九）。現在は廣東省にフィールドを広げ、八〇年代以降の道觀復興に關する調査を進めるとともに、清末から民國期にかけての廣東道教に關する資料の収集を行っている（志貫二〇〇一）。清末、廣東の既存道觀の多くは王朝の庇護を失って荒廢したり、財政難から道教法事を請け負ったりといった状況が見られたが、一方で羅浮山の酥醪觀のように、多くの在家道教徒が修養を目的として長期滞在し、清末には富裕層の高級修養・隱遁施設として活氣を呈していた道觀もある。⁽²⁾ また廣東各地では、地域エリート層が中心となって、新しい道教系慈善結社を組織していく動きも起こっていた。

近代廣東において新しく勃興してきた道教勢力は、大きく「呂祖道壇（全眞教）系」と「先天道系」の二つに分けられる。ここで「呂祖道壇（全眞教）系」と呼ぶのは、筆者が以前に取り上げた、呂祖を祖師として道教を標榜する

扶鸞結社のことである。こうした道教系結社は、一般には、その立地や形態、活動内容、メンバー構成などによって「仙館（觀）」、「道堂（道壇）」、「齋堂」「善社」「佛堂」などと通稱された。⁽³⁾ 近代廣東地域に勃興してくる道教系結社に共通する特徴としては、少なくとも次の三點が指摘できる。第一に呂祖道壇（全眞教）系、先天道系を問わず、三教合一の立場で自己修養と他者救済を使命とする宗教慈善結社であり、多くの結社で神託を得る手段として扶乩を行っていた。第二に、主たる擔い手となったのは、出家道士や職業道士などの宗教専門職ではなく、文人や商人といった在俗の地域エリート層であった。第三に、廣東省から香港、澳門、東南アジアに進出し、相互に緊密なネットワークを形成していた。

清末の廣東においてこのような新興の宗教慈善結社が勃興していく背景には、海外移民の増加による華僑ネットワークの廣がり、紳商や歸國華僑など新しい富裕層の臺頭といった現象が大きく作用していることは言うまでもない。既存の道觀とそこに所屬する道士に視點を固定する限り、

近代廣東道教の情況は衰退としか映らないが、より廣い視野に立つて、在家道教徒たちが實踐する道教活動に目を向けてみれば、逆に近代廣東という時代と地域だからこそ生じた近代道教の新しい潮流が見えてくるはずである。

本稿は、以上のような問題關心に基づき、近代廣東地域に勃興してきた道教系結社の中でも、先天道系の結社について取り上げたい。後で詳しく述べるように、先天道は十九世紀半ば廣東に入ってから、數十年の間に急激な勢いで廣東全域のみならず香港、南洋へと擴大した。先天道系結社の急速かつ廣範圍にわたる擴大現象は、筆者が以前取り上げた呂祖道壇の隆盛とともに、近代廣東道教を特徴づける重要な要素の一つと言っている。

先天道（先天大道）は、羅教の影響を受けて、乾隆年間江西に生まれた無爲金丹道及び青蓮教の流れを汲む宗教教派であり、これまで主として明清民衆宗教結社研究の分野で取り上げられてきた。代表的なものとしては、羅教から先天道に至るまでの教義を分析した淺井紀氏の研究（淺井一九九〇）や、武内房司氏の清代青蓮教系結社に関する一

連の研究がある。武内氏は、清代青蓮教の救済思想について分析するとともに、道光教案以後分裂し、いくつもの分派を輩出した青蓮教のその後の流れを辿り、長江流域に廣まった劉儀順の一派や、西南地區を中心に發展した歸根門について取り上げている（武内一九九二、一九九四、一九九八）。

他方、香港やシンガポールの先天道は、先天道の結社の一形態である「齋堂」に居住する女性信徒の多くが「自梳女」―「梳起不嫁」（結婚拒否）という生き方を選んだ女性たち―であったことから、女性史の分野や華南地域の文化人類學的、社會學的研究の中で、早くから言及されてきた。その先驅的研究者であるM・トブレイは、一九五〇年代、シンガポールで先天道に屬する齋堂の調査を行い、自梳女の社會經濟史的背景や齋堂の社會的機能、先天道の道統や組織について詳細なデータを殘している（Topley 1963: 1968）。また人類學者A・サンカーは、一九七〇年代に香港において先天道系及び佛教系の齋堂において調査を行い、齋堂の社會的機能について分析している（Sankar 1978）。

この他、香港の社會人類學者曹玄思は先天道の運営する老人ホームで暮らす女性信徒たちの中から、自梳女として生きた七人の女性から聞き取り調査を行っている（曹玄思一九九四）。

こうした文化人類學的、社會學的アプローチによる先天道の齋堂研究は、宗教結社を取り締まる官憲側の文獻資料に頼りがちな歴史學の宗教結社研究に比べ、信徒へのインタビューや參與觀察により、齋堂の實態や信徒のライフヒストリーを詳細かつ生き生きと描き出している點に強みがある。また現在どここの齋堂でも、信徒の高齡化のために聞き取り調査を行うことが年々困難になっている現状から見て、齋堂が盛んであった一九五〇年代から七〇年代の狀況を伝えるこれらの研究は、既に歴史的な價值を持っているとも言える。

だが、齋堂の文化人類學的、社會學的研究に共通する弱點とは、個々の齋堂の活動や運営形態については詳しいが、それらの齋堂が屬する先天道という宗教教派を俯瞰的にとらえる視點が乏しい點である。また女性信徒に焦點を

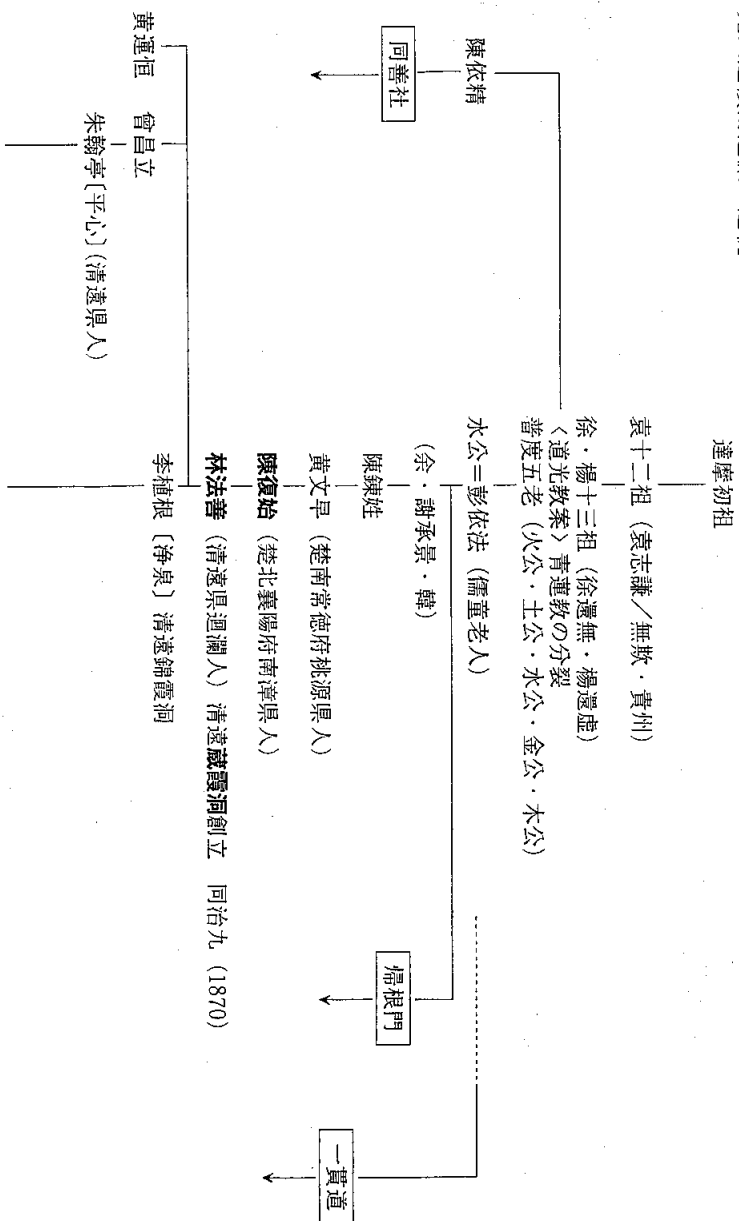
あてているため、男性信徒の果たした役割があまり見えてこない。確かに先天道の齋堂は、女性信徒によって創設され、運営されていたところが多いが、先天道が廣東、香港、南洋へ急速に擴大していく背景には、各地の道堂を行き來し、さまざまな任意團體の名譽職を兼任していた男性指導者の、人脈を最大限に生かした精力的な布教活動が、大きな原動力となっていたことも無視することはできない。

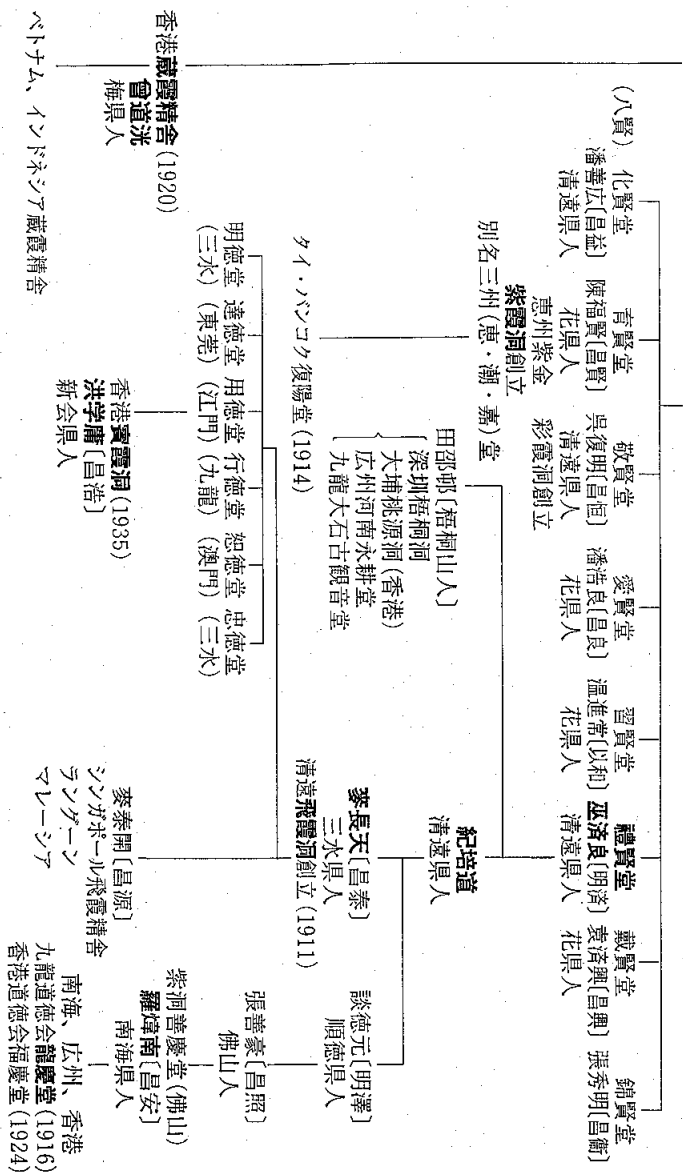
本稿ではまず、廣東の先天道―すなわち「先天道嶺南道派」の道脈を辿り、先天道が廣東から香港、南洋へと擴大していく経緯を明らかにする。そして、その過程において特に重要な役割を果たしたいくつかの結社に注目し、文獻資料と筆者が廣東・香港で行ったフィールドワークをもとに、その擔い手、活動、思想等を、男性と女性兩方の側から出来る限り明らかにしてみたい。

一 廣東への傳播と擴大

清代中期、貴州、雲南、四川を中心に擴大した青蓮教

先天道嶺南道派の道統





参考文献『寶霞叢録』(1939年)、『道脈總源流正本』(1924年)、
 浅井紀『明清時代民間宗教結社の研究』研文出版(1990年)

〔 〕内は道号

は、道光年間に二度の大弾壓を被った後分裂し、各地に潜伏して多くの分派を輩出した。その宗教傳統は各地で脈々と受け繼がれ、やがて清末から民國初期にかけて、先天道、同善社、歸根門、一貫道などの新興宗教教派を生み出した（淺井一九九〇・三三三―三九一）。

廣東に先天道が傳えられたのは、徐・楊十三祖の後に出てくる「普度五老」の一人彭依法（儒童老人）の道脈に連なる陳復始という教徒が、咸豐十年（一八六〇）湖北から粵北に入り、布教活動を行ったところから始まる。陳復始はもともと楚北宜昌府で紙屋を営んでいたが、鄂區十地の艾運春の命を受けて粵北に入り、清遠縣上廓で林法善という藥材店の主人と出會った。⁽⁴⁾やがて林法善は陳復始の弟子となり、店を開放して講道場の場を提供した。陳復始の教えは城郷の紳士や近郷の村人たちの間で評判となり、弟子となる者が日ごとに増えていった。⁽⁵⁾

同治九年、林法善は地元の紳士の協力を得て、神仙の乩示に従い清遠縣の飛來峽に廬舎を建て藏霞古洞と名づけた。林法善の死後は孫弟子にあたる朱翰亭（號廣霞、または

平心）らが中心となり、宣統年間までに報本祠、三教聖人を祀る三聖寶殿、玉皇殿などが増築された。⁽⁶⁾一九二〇年代の最盛期には、ここに男女合わせて三百人近い信徒が暮らしていた。

この藏霞古洞から分枝した先天道系の結社は廣東全域に擴大した。「先天道嶺南道派の道統」圖に示すように、藏霞古洞から分かれた八賢堂が清遠縣とその近郷の花縣、惠州などに廣がった。八賢堂のうち育賢堂、すなわち惠州紫霞洞は別名三州堂とも呼ばれ、惠州、潮州、嘉應州の堂を統轄する地位にあり、この一帯では最も大きな勢力を持っていた。⁽⁷⁾

また禮賢堂からも多くの結社が分枝した。禮賢堂の創始者巫濟良は醫師でもあり、彼のもとに集まった弟子たちは、後に清遠、佛山、深圳、香港などで大きな勢力を持つ結社を創立した。後述する清遠飛霞洞の創始者麥長天もその一人である。

一九三〇年代までに、先天道の道堂、齋堂は、廣東のみならず、香港やシンガポール、マラヤ、ベトナム、タイな

ど南洋地域にまで廣がった。香港と南洋地域における先天道の擴大については、第四節でとりあげたい。

二 清遠飛霞洞の活動と理念

清末から民國期にかけて廣東各地に設立された先天道系結社の中でも、建物の規模、收容人數において突出していたのが清遠縣の飛霞洞である。飛霞洞は、三水縣人の麥長天の提唱により、一九一一年から二十年近い歲月をかけて藏霞古洞と同じ飛來峽に設立された。麥長天は一八四二年三水縣の貧しい家庭に生まれ、早くから工場や店の雑工として働き、やがて商賣に成功した。光緒年間に巫濟良の弟子紀培道と出會い、先天道に入道した。その後は佛山、廣州、東莞、新會、香港等を行き來して、道堂の設立に奔走した。光緒末年には、甥の麥泰開とともに南洋へ渡って布教活動を行い、一九一二年に帰國した後は私財を投げ打って飛霞洞の建設に着手した。一九二七年、麥長天は再度南洋へ渡り、シンガポール、マラヤに齋堂を開いた後歸國し、まもなく飛霞洞にて死去している。⁽⁸⁾

飛霞洞は一九五〇年代に閉鎖されたが、一九八〇年代以降、清遠縣旅遊局によって建物や文物の修復が進められ、現在は觀光名所として一般公開されている。飛霞洞仙觀と呼ばれるメインの建物は山の斜面に沿って建てられた六階建ての石造建築である。内部は三教聖人を祭る三教殿、古佛聖眞殿、無極宮金母殿などの祭祀空間と、藏經閣、客堂、修身舍などの公共空間、さらに信徒の生活空間である道房に分かれている。

(一) 仙觀の生活

最盛期の一九二〇年代、この飛霞洞仙觀には男女合わせて六百人近い信徒が暮らしていた。⁽⁹⁾ 清遠縣旅遊局ではかつて元信徒から聴きとり調査を行ったことがあり、その内容を飛霞洞の一室に、かつて仙觀内で使われていた家具、器物、扁額などとともに展示している。それによれば、飛霞洞では、信徒自ら畑を耕し、家畜を飼い、自給自足の生活を行うとともに、洞内に紡織工場を設け、麻、綿布を生産し、収入源としていた。この他の運営資金としては、裕福な信徒や南洋華僑からの寄付があった。

飛霞洞に居住する女性信徒、すなわち「齋姑」はいくつかの等級に分かれており、入洞時、銀三百元を拂うと一人部屋が與えられて一生そこで暮らすことが許され、労働は免除された。銀二百元を拂った場合には、四人ないし六人部屋で共同生活をし、労働は免除となる。入道費をまったく拂えない場合は、洞内の雑用が課される。齋姑は付近の寺廟や個人の死者超度に呼ばれて誦經を行うこともあり、一回の超度で十數元をもらい生活費にあてていた。

『飛霞洞誌』は、飛霞洞周邊の景勝や風水、飛霞洞創立に關つた人物の事跡、飛霞洞の宗旨、信徒の詩文などを集めて編纂されたもので、その中には飛霞洞の洞務章程を記した「事略」という記事がある。ここには「祀聖記念」「報本記念」「著書」「傳道」「放生」「買辦」「種植」「招待」「警衛」「念經」の十項目が擧げられ、飛霞洞の日々の営みの中で、どのような務めが重視されていたかがわかる。一部を紹介すると、飛霞洞では毎年孔子と關帝を祭祀する他、報本洞に各同人の宗祖の牌位を祀り、毎年春秋に祭祀を行っていた。また善書や經典の出版に力を入れてい

た。「著書」の項目には、儒釋道の基本經典の他、『天人祕籙』、『忠義鏡』、『道綱辨正』、『國粹雜誌』、『三教同宗』、『三期普度經』、『金剛彙纂易知』、『五言金科』、『度人舟詩本』、『先天便覽』等の書名が擧がっている。⁽¹⁰⁾この中の『天人祕籙』は飛霞洞オリジナルの善書で、現在その原版の一部が飛霞洞に保存されている。内容は内丹、道統、三字經、修養論など多岐にわたり、その多くが扶乩による神仙の乩示という形式で記述されている。

(二) 『飛霞洞誌』の擔い手

『飛霞洞誌』にはこの他、飛霞洞の中心メンバーによる「種植經濟論」「養老慈善論」「修養要旨論」「普度以三教爲重論」「接引衆生論」などの諸論文が掲載されており、飛霞洞の活動を支える理念がわかるものであったかをうかがい知ることができる。諸論文の内容に觸れる前に、まず『飛霞洞誌』を編纂した飛霞洞の中心メンバーとはいったいどのような人々であったかを見ておきたい。

『飛霞洞誌』の編纂に携わった何廷璋（道號昌達、乾貞子）は東莞縣人の元貢生、洞誌の跋文に「現代教育先進之巨

子⁽¹¹⁾』と稱えられたように、香港の學校で漢文を教える教師であつた。一九二八年、香港を訪れた麥長天と出會ひ、飛霞洞誌の編纂を依頼された。彼はもともと禪宗の信奉者であつたが、麥長天との出會ひによつて、香港での教職を退き、先天道に入道することを決意した。⁽¹²⁾

何廷璋は漢文教師の他、香港の國粹雜誌社の編集者という顔も持っていた。國粹雜誌社の刊行する『國粹雜誌』(一九三二年十一月創刊)は、香港文明書局と廣州河南の文在茲書局を發行所とし、香港、廣州のみならず廣東の地方都市や南洋各埠の書局、善堂、藥局に廣く販路を持つ總合雜誌であつた。『國粹雜誌』における「國粹」とは「三教の精神」を意味し、「國粹存すれば則ち國は存し、國粹亡びれば則ち國は亡ぶ。…昨今世風は日々下落し、道德は滅びつつある。我國の亡びざるは國粹有る故による」⁽¹³⁾というように、中國の存亡を左右するものとらえられていた。

『國粹雜誌』の創刊後まもなく、何廷璋らは香港島の德輔道に三教總學會という結社を設立している。その内容は、『國粹雜誌』の出版や佛事報の刊行の他、四書五經、

佛典の講解や詩文指導講座の開催、醫藥針灸の知識や内功靜坐法を傳授する講座の開催などであつた。⁽¹⁴⁾三教總學會のメンバーの中には中醫や藥局の店主がおり、『國粹雜誌』の卷末には會員が經營していた藥局の廣告も掲載されている。醫藥に關連する講座を擔當したのはこうした人々であつた。

『國粹雜誌』の内容は、儒教、佛教、道教の教義や經典の解釋などを主としていたが、毎號必ず農學、醫學、物理學に關する記事が掲載されていた。特に農學は「牝羊之選種」「驅虫劑之製法」など、實際に農業に携わっている人でなければ關心をひかないような、實用的な農學知識に關する記事が目立つ。國粹雜誌社の主任馮其焯は、『飛霞洞誌』の記述によれば、新界紛擾で農學求新社という、新しい技術を取り入れた農場を營む人物であつた。⁽¹⁵⁾こうした點から、當時國粹雜誌社に關わつた人々が、「保全國粹」というスローガンを掲げ中國固有の傳統文化の復興を目指しながらも、近代の新しい技術や科學知識に對しても強い關心を持つ人々であつたことがわかる。『國粹雜誌』の執筆

者と『飛霞洞誌』の執筆者は一部重なっており、その中には師範學校を卒業した二人の女性も含まれている。

(二) 飛霞洞の理念

飛霞洞の理念を知るには、飛霞洞で作成されたさまざまなテキストを網羅的に検討する必要があるが、紙数の制限もあるので、本稿では、『飛霞洞誌』に修められた論文のうち、特に重要であると思われる「修養五大綱」、「種植經濟論」、「養老慈善論」についてとりあげてみたい。

飛霞洞における修養は、「得人」「得地」「讀書」「靜坐」「衛生」という五つの方面から爲されるとされ、それぞれの條目で留意すべき五つの項目がある。たとえば、「得人」の修養に必要とされるのは「文學、道德、調辦、會計、庶務」、「得地」の修養では「形勢、通氣、光線、樹木、水源」、「讀書」の修養では「國史、科學、責實、演講、推行」、「靜坐」の修養では「悟禪、丹訣、攝心、調息、唸佛」、「衛生」の修養では、「慎食、慎居、運筋、呼吸、戒欲」となっている。これらの項目から、飛霞洞における修養においては、靜坐や呼吸法の他に、文學や國史などの教

養や會計、庶務などの實學的知識、そして修養の地の環境が重視されていたことがうかがわれる。

次に「種植經濟論」について見てみたい。飛霞洞では信徒自ら畑を耕し、自給自足の生活を行っていたことは既に述べたが、それは次のような理念に基づいていた。

「種植は生を謀り義を通す。正に大本の業にしてこれに逾るものはない。すべて萬物は農より出で、萬類は農に養われる。工も、商も、士もそうである。何一つもともと農でないものがあるだろうか。飛霞洞の高山と險しい嶺々、大地のうねりは、種植の良方を得れば、收穫は容易く、洞務の要用は盛んとなり、奥深さを増す。種植によって財源を開けば、すべての善はおこなわれる。」⁽¹⁶⁾

この記述が示す通り、飛霞洞では「すべての物は農に歸す」という立場に立ち、種植によって飛霞洞の財政を豊かにし、廣く善を行うことを理念として掲げていた。こうした考え方は儒教の傳統的な農本主義の流れを汲んだものと見えるが、實際の農法という点においては、傳統的なやり

方に固執するのではなく、西洋の新しい技術を積極的に取り入れようとする姿勢を持っていた。

「今や科學の盛んな輝かしい時代である。農は秀を育てる。財は農より出で、物は農に歸す。中山三民主義のたすけとなり、すなわち麥長老が一生はげむところとは、新法が遍く中國に行き渡り、技が天工にかわることである。舊章は西歐に浸入せざれば、藝は人により造られ、事は必ずその敏捷を求め、功はまたその速成を望む。種植があれば地は荒廢のおそれはない。種植があれば人が一時の快樂をむさぼるような弊害はなくなる。新法を行い繼續して種を時けば、自ずと盛んになり、舊章に拘泥し古臭い考え方のままでいれば、いつか鬱鬱の觀が顯れる。」⁽¹⁷⁾

この記述に見られるように、近代の科學主義の洗禮を受けた民國期の知識人であった飛霞洞の指導者たちは、孫中山の三民主義を使命とし、實學としての農業を目指す人々であった。⁽¹⁸⁾

種植を振興し、財政を豊かにする、その目的とは、廣く

善を行うためであった。中でも重視していたのが「養老」である。何廷璋の「養老慈善論」と稱する論文によれば、飛霞洞の「養老」とは、「生有養、病有醫、死有葬、四時有序、超升淨土（生きている間は扶養し、病になれば醫者に見せ、死すれば葬り、春夏秋冬に祭祀を行い、淨土に超升させること）」を意味する。⁽¹⁹⁾ この「生養死葬」の理念こそ、先天道の指導者たちが各地に積極的に齋堂を設立し、社會的弱者を入道させていく理論的根據となったと考えられる。

飛霞洞では信徒が病に倒れ、危篤に陥った時の對處から殯葬、追善供養に行うべき儀禮の手順、讀み上げる祭文までを事細かに記した『同人了道規章』（一九三四）というマニュアルを作成していた。信徒が亡くなった場合は、専門の職能者には委ねず、同門の信徒たちによって獨自のやりかたで弔いが行われ、裏山の墓地に葬られた。その後は齋堂内の男女別々の祖堂に位牌が安置され、定期的な供養を受けることができた。このように、一定の費用を拂って入道すれば、老後の扶養、死の看取り、埋葬、そして死後の

供養まで保證してくれるシステムを導入していたという點が、老後と死後の問題に不安を抱える人々にとって大きな魅力となったことは間違いない。

三 女性たちの先天道

廣東の先天道系結社に實際に多く入道したのは女性たちだった。中でも、「自梳女」と呼ばれる、結婚を拒否し、獨身を誓って「梳起」という儀式を行った女性たちが多數含まれていたことは既に多くの研究で明らかにされている。スタッカードの研究によれば、自梳女は廣東珠江デルタ地域一帯、とくに南海、順德、番禺一帯の養蠶業の盛んな地域において、二十世紀初頭に顯著となった。もともとこの地域では、結婚した娘が一定期間夫の家に入らず、實家で家業を手傳いながら暮らす風習があった。またこの地域は、未婚女性が「女仔屋」と呼ばれる娘宿で共同生活し、義姉妹關係を結ぶ風俗が盛んなどころでもあった。養蠶業を主體としたこの地域の農家では、糸くりの技術に長けた娘たちは貴重な勞働力となっていたが、十九世紀以降

中國産の絹糸の需要が高まるとともに、娘たちは高い賃金収入を得るようになった。十九世紀末、機械化された製糸工場が各地に設立され、娘たちを雇い入れるようになる。娘たちの經濟力はさらに高まり、同時に行動半徑も廣がった。こうした状況の中で、この地域の若い女性たちの間に、結婚はするが賠償金を拂って婚家に行かない「不落家」、あるいは結婚を拒否する「不嫁」、もしくは「梳起」の儀式を行い、一生獨身を誓う「梳起不嫁」といった形で、結婚を拒否する風潮が廣がった (Stockard 1989:76-166)。

珠江デルタの結婚拒否を取り上げた先行研究の多くが、先天道の齋堂で暮らす自梳女を主なインフォーマントとしていたことから、先天道の教義と結婚拒否運動との相關關係がこれまでしばしば問題にされてきた。この點に關してトプレイは、シンガポールの先天道系齋堂の女性信徒たちが所有していた二種類の寶卷を挙げ、結婚せず出家する生き方を稱える寶卷のメッセージが、女性たちに結婚拒否を促す一つの刺激になった可能性を論じている (Topley

1976: 75)。相田洋氏もトブレイの見解を支持し、トブレイの紹介した『香山寶卷』、『劉香寶卷』とスタックカードが紹介した木魚書『錦繡食齋』の内容を分析し、これらのテキストの説く女性成道の物語が女性たちの結婚拒否運動の精神的支えになったと結論づけている(相田一九九三: 四七四—四八三)。

一方サンカーは、彼女が調査した齋堂の女性たちの間でこうした寶卷が廣く普及していたという證據も、また女性たちが宗教的理由から獨身を選んだという事例も見出せなかったとして、トブレイの見解に對して否定的な見方をとっている(Sanker 1978: 17-18)。またスタックカードも、一部のインフォーマントが結婚を拒否し齋堂に入る女性を諺った木魚書の名前を挙げたことを認めながらも、自梳女という生き方を選択するにあたっては、テキストよりも姉妹や親戚の女性たちの影響力の方が大きかったであろうという見解を示している(Stockard 1889: 77)。

筆者もこの問題については明確な答えを出し得るわけではない。ただ、結婚拒否運動と結びついたかどうかは別と

して、清末、先天道の教派によって作成されたと見られるテキストの中には、確かに女性たちに結婚せずに修行を促すようなメッセージを含むものが存在したことを、次に挙げる二つのテキストを例にとり指摘しておきたい。

相田氏は『香山寶卷』の異本の一つ『觀音濟度本願眞經』が、先天道など羅教の流れを汲む宗教結社によって作成されたのではないかと指摘している(相田一九九三: 四七七)。(20) 確かに『觀音濟度本願眞經』の咸豐本には、序文に「幸遇普定仙師指示先天大道授」とあり、先天道の一派が民間に傳わる觀音成道說話を下敷きとして作成したと見られる形跡が隨所に見られる。このテキストの中で、慈航(觀音)は衆生を救うべく瑤池金母の許しを得て下凡し、妙莊王の三女妙善として生まれ變わったと設定されている。慈航は瑤池金母に上奏するにあたり、「男子の中には、三教の理を知覺し、何が善かを極める者もある。ああ、しかしながら女子を見るに、天理の循環や世の禁戒するところを理解せず、墮落しきってしまう者もある」と女性の救済の必要性を説き、慈航自ら「女身に轉じ、後世に一つの模

範を示し、下界の婦女たちに私を見習わせ修行させる」ことを決意していることから、このテキストが特に女性の救済を意圖するものであったことは明らかである。だが残念ながら、このテキストが先天道のどの分派で作成されたものかは全く明らかにされていない。また先天道嶺南道派にこうした寶卷が傳承されていたかどうか不明である。

先天道の一派によって作成された女性成道を説くテキストのもう一つの例として、『玉露金盤』という鸞書を見てみよう。光緒庚辰年（一八八〇）丹成臺と稱する乩壇に降臨した瑤池金母の紋文を冒頭に掲げるこのテキストは、凡例に「是書者、洩盡先天大道」とあり、また用語や内容から見ても、先天道やその前身となった羅教や無爲金丹道の思想が色濃く反映されたものであることがわかる（鄭志明一九八八）。『玉露金盤』の中で、九十二億の残された人類を救うため、呂祖とともに瑤池金母の命を受けて下界に遣わされた悟道眞人とは、もともと天界で瑤池金母に仕える仙女であったが、誤って金壺を壊した罪で下凡させられる。悟道眞人は貧しい家の娘として生まれ変わり、他家に嫁い

で二人の子供を産んだ後、洗心齋戒して先天大道を傳授され、多くの人々に修行を勧める。本文では特に對象を女性に限定しているわけではないが、前半部分を占める各神仙の降筆による韻文の中の、やはり仙女とおぼしき龍吉眞人の「五更辭」では、「何須苦苦嫁兒郎」と問い、「觀音老母修成佛、斗牛宮里七仙姑、…囑咐你、莫糊塗、及早參師念南無」と呼びかけ、女性たちに結婚するよりも早く修道することを勧めているのである。

『玉露金盤』は臺灣にも傳播し、慈惠堂のテキスト『瑤命皈盤』に改編されるなど、かなり廣い地域に流布していたようである。筆者が参照した東京大學東洋文化研究所蔵の光緒甲辰年重刊本の表紙には「粵東、河南（空欄）藏版」という文字が刻印されており、清末の廣東地域にも流布していた可能性がある。

もちろん、女性に修道を勧めるこうしたテキストが先天道一派によって作成され、流通していたとしても、それが女性たちの結婚拒否の直接的な動機となったことを證明するものではない。ただ、先天道は女性神の信仰を中心に

据え、女性の救済を目的としたメッセージを多く含んでいた點で、女性に強くアピールする宗教教派であったことは確かである。

筆者はむしろ、先天道と自梳女が結びついたのはテキストの影響というよりも、先天道が齋堂というシステムによって「生養死葬」を保證していた點にあると考える。未婚女性にとって自分の將來に關する最も氣がかりな問題は、老後の扶養と死後における靈魂の安寧であった。女性たちが賠償金を支拂ってでも結婚という形態にこだわったのは、死後、第一夫人として婚家に位牌が祀られるという保證があったからである (Stockard 1989: 49)。

一般に自梳女となった女性は、年をとってからは生家を出て、自分一人で、あるいは仲間と資金を出し合い、「姑婆屋」と呼ばれる家屋を購入してそこに住むことが求められた。また死後は宗族の祠堂とは別の「姑婆廟」に祀られた (Sankar 1978: 81-82; Stockard 1989: 81-89)。一定の費用を支拂い、齋堂に入るのも一つの方法であった。齋堂は先天道に獨特の形態であったわけではない。民國年間、廣州市

には齋堂と呼ばれる施設が二百カ所以上あり、道教的色彩が強い先天道系のものと、佛教的色彩の強い三寶堂系の二つの種類があったという。齋堂では生きている間の扶養から葬儀、位牌の安置まで面倒を見た。⁽²⁾華南の傳統社會においては、こうした齋堂や庵堂と呼ばれる宗教結社が、身寄りのない單身女性の一種のアジールとして機能してきたのである。

齋堂は特に、故郷を離れ、單身國外に渡った女性たちによりどころとなった。一九二〇年代後半、中國の生糸産業が競争力を失って衰退し、世界恐慌によって壊滅的な打撃を受けると、失業した女性たちは香港やシンガポールへ活路を求め、多くの場合「阿媽」と呼ばれる住み込みの家政婦として働くようになる。サンカーは、故郷を離れて香港へ渡った自梳女が、「結拜姉妹」のネットワークを通じて仕事をを見つけ、さらにそこからさまざまな形態の相互扶助グループが形成していく経緯を描いている。サンカーによれば、齋堂とは女性たちの相互扶助グループの延長線上に位置付けられるものであり、自梳女の生活に安定と金銭的

保證、安全、仲間つきあい、宗教的正当性を提供するものであった (Sanhar 1978: 332)。

先天道の擴大という觀點から見れば、齋堂というシステムは末端組織を擴大する上で好都合であった。これまでの研究で指摘されているように、先天道では女性たちが宗教的に高い位につき、堂主となって齋堂を運営する道が開かれていた⁽²²⁾。また氣の合う女性たちが資金を出し合って購入した家屋やアパートの一室を改造し、齋堂として運営することも可能だった⁽²³⁾。近代廣東において先天道の齋堂がかくも急速に擴大し得た要因の一つはまさにこの點にあると思われる。自梳女を含めた單身女性とその經濟力、それを取り込む齋堂というシステム、さらに女性たちの移動という條件が結びつくことによって、先天道は廣東から香港、南洋へと、増殖していくことが可能となったのである。

四 香港、南洋地域への展開

(一) 廣東から香港へ

咸豐十年に廣東に入つた先天道は、その後數十年の間に

珠江デルタ地域と粵北地域に廣がり、二十世紀初頭その流れは香港に及んだ。先天道の香港進出は一九一二年、九龍東部の牛池灣村に設立された萬佛堂⁽²⁴⁾が最も早いと言われている (鄭、黃一九九三：四六)。

その後、廣東から香港に進出した主な先天道の系統を三つ挙げておこう。一つは九龍道德會龍慶堂 (一九一六、深水埗) の系統である。龍慶堂は、佛山成慶堂 (一九二一) や南海縣一帶の先天道系結社の總堂的存在であつた紫洞善慶堂 (一九一五) の創立者である羅煒南とその弟子たちによって設立された。羅煒南は、順德縣で善書坊を営んでいた談德元のもとで入道し、乩手として南海縣一帶の先天道の發展に寄與した⁽²⁵⁾。龍慶堂系統の道堂の特徴は、早くから理事會制度を導入して組織を公開し、對外的な慈善活動に力をついた點にある。一九四八年には他の道教系結社に先驅けて香港に老人ホームを設立した⁽²⁶⁾。また一九六〇年代には、青松觀や圓玄學院等の全眞教系の道堂と協力し、香港道教聯合會の設立に盡力した。

二つめは、一九二〇年、清遠藏霞古洞の朱翰亭によって

香港新界粉嶺に設立された藏霞精舎である。藏霞精舎は、香港・廣東の慈善活動に熱心な商工界や學術界の名士の支持を受けて設立され、落成時には朱汝珍や陳伯陶といった學術界の名士や、廣州の九大善堂の一つ潤身社などから數多くの書や對聯が贈られている。

第三は新會縣人の洪學庸が一九三五年、牛池灣に開いた賓霞洞である。洪學庸は清遠飛霞洞の麥長天を師として入道した後、江門に用德堂という道堂を設立した。また以前から江門に崇善堂、萬靈善院などの善堂を開設し、贈醫施藥、留醫、義學などの事業を進めていた。一九三三年、政治的な騷亂にまぎこまれた洪學庸は呂祖の乩示に従って、香港に道堂を開くことを決意した。賓霞洞の名前は、呂洞賓の賓にちなみ、呂祖から授けられたものである。⁽²⁷⁾

香港の道教研究者游子安氏は、香港における先天道系結社の展開を概観した最近の論文の中で、自らの實地調査と収集した先天道の刊行物に基づき、香港における先天道系道堂の數の推移をまとめている（游一九九・一〇四—一〇五）。それによれば、一九五六年香港には先天道系の結社が

四十九ヶ所あり、一九六八年には七十二ヶ所に増えている。先天道の結社が増加した一九五〇年代から六〇年代の時期とは、自梳女の世代がちょうど老齡期にさしかかり、「阿媽」をやめて老後をどこで過ごすかを考え始めた時期でもある。新しく設立された先天道系結社の中には、單身女性が複數で金を出し合つて設立した小規模な齋堂も含まれていた。

(二) 南洋への展開

最後に、廣東の先天道の南洋展開とそれを推し進めた人々について述べておきたい。先天道嶺南道派の南洋展開が始まった正確な年代は今のところ明らかではないが、筆者の手にある資料を見る限りでは、先述したように、飛霞洞の創立者麥長天が光緒末年に南洋に赴き、布教活動を行ったという記録が最も早いものである。麥長天はその後一九二七年にも甥の麥泰開とともにシンガポール、マレーシアに飛霞精舎を始めとする齋堂を開設している。シンガポール、マレーシアの齋堂は、當時香港經由でこれらの地域に出稼ぎに出た多くの單身女性たちを積極的に受け入れて

いった。また年をとって仕事をやめた女性が資金を出し、自ら齋堂を創立するケースも多く見られた (Topley 1978; Grew 1988)。

この他、先天道の南洋布教に多大な貢献をした人物に梅縣出身の曾道沆 (漢南) がいる。曾道沆は梅南の京風坪道院で入道した後天恩の位を授かり、宣講善化に務めるとともに、道友とともに荒地の開墾に力を注いだ。一九四〇年代初頭には、梅縣の呂帝廟に附屬する廣濟善堂の運営に携わった。一九四三年先天道重慶總會長となり、一九五四年に東南アジア各國を歴訪し、布教活動に力を注いだ⁽²⁸⁾。

曾道沆は一九三〇年、梅縣にある梅江大橋の建設のための資金調達に奔走した際、海外、特に南洋華僑から多くの寄付を集めた経験⁽²⁹⁾があり、南洋華僑とのつながりはこの時から既に培われていたものと思われる。一九五四年の南洋視察では、曾道沆は、シンガポールから、クアラルンプール、イポー、モリシヤスをまわり、先天道の結社だけでなく當地の佛教會や中華學校、華商總會なども訪問して⁽³⁰⁾、南洋への布教は、裕福な南洋華僑からの寄付を募る手

段でもあった。

この曾道沆のもとで布教活動に携わり、後に南洋先天佛教總會や香港先天道會總會の主席となった江道泓 (慧光) も、南洋布教に貢献した指導者の一人である。一九二三年廣東省普寧縣の貧しい家庭に生まれた江道泓は、母親が普寧縣のある先天道系の結社に出入りするようになったのをきっかけとして、自らも入道を決意した。一九四五年、紫金縣の三州堂 (紫霞洞) で曾道沆と出会い、命を受けて福建へ赴いた。一九四九年からは、カンボジア、タイを歴訪し、やがてタイに三一善堂を設立した⁽³¹⁾。

一九六六年、バンコクに設立された南洋先天佛教總會は、タイ、臺灣、香港、澳門、ビルマ、ベトナム、インドネシア、シンガポール、マレーシア、モリシヤスなど東南アジア一帯の先天道の佛堂三百餘を統括することを目的として設立された。南洋先天佛教總會の設立には、タイの高僧、華僑商會、中華會館、潮州、客家、海南など各地方の會館、各縣の同鄉會など、タイの華人社會の支持があった⁽³²⁾。

曾道洗は客家、江道泓は潮州人であったことから推察されるように、南洋地域への擴大にとりわけ大きく貢献したのは客家や潮州人の信徒であつた。たとえばタイに設立された先天道系佛堂の創立者は、潮州府揭陽縣、普寧縣、潮陽縣などの出身者が多い。⁽³³⁾これらの地域は早くからタイへの移民を送り出してきたところであり、江道泓ら先天道の指導者層は、移民によって形成された人的、經濟的ネットワークを利用しながら各地に佛堂を設立していったと見られる。

おわりに

本稿では、先天道嶺南道派の廣東・香港・南洋への擴大の経緯を辿り、その中から主要な結社に焦點をあて、その擔い手、思想、活動等について概観してきた。最後に、以上の議論を踏まえた上で、近代廣東において先天道がなぜこれほど急速かつ廣範圍に擴大し得たのかについて整理してみたい。

まず、男性の指導者層から見ていくと、その多くが商人、

醫師、教師、郷紳などであり、比較的裕福で教育程度の高い階層が多かつたことがわかる。彼らは三教の教えを「國粹」と呼び、中國固有の傳統文化の復興を目指す保守性と、近代的な教養や新しい科學技術に對して強い關心を寄せる革新性を併せ持った知識人であつた。彼らはまた、先天道以外の宗教結社や善堂の運営に携わるなど、さまざまな宗教慈善活動に關わっていた。彼らは商賈や布教の目的で各地を巡り、訪れた先々で各界の人士と交流を持つことによって、ネットワークを廣げていった。すなわち、清末から民國期にかけての廣東における先天道の急速な擴大は、主たる擔い手となつた商人や知識人たちの、こうした地域を越えた商業、學術、教育、宗教、慈善界のネットワークに支えられていたと考えられる。こうしたネットワークは廣東から香港、南洋各地に及び、先天道擴大の基盤を築いたと言えよう。

一方女性信徒の觀點から見た場合、遡れば羅教の時代から、彌勒、觀音、瑤池金母といった女性神を崇拜し、また作成された寶卷や善書の中には特に女性の救済を目的とし

たメッセージが含まれているなど、先天道は女性に強くアピールする内容を含んでいた。だが、女性たちが先天道に入道した直接的な理由は、先天道が「生養死葬」を保証する齋堂という形態をとり、女性信徒を堂主として齋堂を運営する道を開いていたという点にあると考える。先天道は、齋堂というシステムを通して自梳女を始めとする單身女性たちを取り込み、女性たちの義姉妹關係やその他さまざまな相互扶助グループのネットワークを活用することによって末端組織を増殖していった。

つまり、近代廣東・香港・南洋における先天道の急速かつ廣範圍にわたる擴大は、こうした男性信徒と女性信徒のそれぞれのネットワークと經濟力が結びつくことによって初めて可能であったと考えられる。

しかしながら、一九七〇年代以降の先天道は、各堂を統合する高位の指導者層を失い、新しい信徒を獲得できないまま社會の急激な變化の中で取り残されていく。近年は信徒の高齡化と後繼者の不在により閉鎖される齋堂が後を絶たず、一九六〇年代には七十あった齋堂は、一九九九年に

は四十數ヶ所に減少した（游一九九二—一〇六）。

最後に今後の課題を二つ挙げておきたい。第一に、清代青蓮教の分派の中には、羅教の傳統を受継ぎ、強い終末觀や彼岸的な救済思想を持つところがあつたが、筆者が収集した嶺南道派の文獻を見る限り、そのような特徴は希薄である。嶺南道派の教義や活動が、他の地域や時代の無爲金丹道、青蓮教の分派—たとえば同善社や臺灣の齋教など—と比較していかなる特徴を持つのか、またそこにはどのような時代的、地域的要因が作用しているのかといった問題は、近代廣東における先天道嶺南道派の擴大要因を考える上で重要な課題となろう。第二は、冒頭で觸れた道教の近代化に關連する課題である。本稿でも一部紹介したように、飛霞洞關連のテキストは、「近代西洋文明」や「科學」の壓倒的優勢な時代において、香港・廣東という先進地域の知識人道教徒が、「道學」や「修養」の價值をいかに再認識し、新たな意味付けを施していったのかという問題を考える上で、さまざまな示唆を與えてくれる。今後はより網羅的な資料の解讀を行い、先天道嶺南道派の理念を近代

の思想的潮流の上に位置づけていくことを目指したい。

註

- (1) 廣州宗教志編纂委員會編『廣州宗教志』廣東人民出版社、一九九六年、一〇八頁。
- (2) 酥醪觀は、葛洪が籠った羅浮北庵の地に康熙年間設立された道場を前身として發展したが、同治年間荒廢しつつあったところを、『長春道教源流』の作者として知られる陳銘珪が住持として入り、資金を募って復興された。清末の酥醪觀の隆盛については「志賀一九九・一七八」を参照せよ。
- (3) 一般に風光明媚な山間に建てられた大規模な施設は「仙館（觀）」、街中の小規模なものは「道堂（道壇）」、喫齋を旨とし、女性信徒が多く暮らす施設は「齋堂」と呼ばれた。
- (4) 先天道嶺南派の道統を辿ることのできる資料には、現在筆者が入手しているものに限れば、『道脈總源流正本』（香江新界桃源洞梧桐山人田邵邨序、一九二四年）と『寶霞叢錄』（寶霞洞創立者洪學庸序、一九四九年）がある。
- (5) 曾道洸「藏霞古洞源流紀略」「大道」（香港先天道會）第二期、一九五七年、三二—三三頁。同資料は游子安氏のご好意により複製させていただいた。
- (6) 「藏霞古洞誌序」朱汝珍他編『藏霞集』卷一、三八頁。「藏霞集」は三卷から成るが、筆者が入手したのは一巻のみ。編者朱汝珍は清遠縣出身の元進士。一九三〇年から香港に居住

先天道嶺南道派の展開

し、香港大學教授、孔教學院院長などを歴任した後、一九三六年に南洋に赴き孔教の宣揚に力を注いだ。

- (7) 曾道洸「陳昌賢先生傳略」「大道」第二期、一九五七年、二九頁。宇文「紫霞洞概述」「大道」創刊號、一九五六年、二七頁。
- (8) 張開文「故主持麥長天先生行述」「飛霞洞志」第二卷、一九三一年、二七一—三七頁。三水縣地方志編纂委員會編『三水縣志』廣東人民出版社、一九九五年、一三三—一三六頁。
- (9) 「仙觀」と呼ばれる宗教慈善結社の中には、呂祖を祖師として祀る全真教系の結社も多く含まれていたが、全真教系の仙觀は先天道系と異なり、男性しか入道を認めないところが多かった。
- (10) 「事略」「飛霞洞志」卷一、二四—二八頁。
- (11) 張開文「總序後跋」「飛霞洞誌」下集、卷四、八四頁。
- (12) 何廷璋「洞誌總序一」「飛霞洞誌」上集、卷一、六四頁。
- (13) 何廷璋「國粹雜誌發刊詞」「國粹雜誌」第一號、香港文明書局、一九二三年、九頁。
- (14) 「丙寅年三教總學會啓事」「國粹雜誌」第四〇號、香港文明書局、一九二六年。
- (15) 馮其焯は香港の儒教團體の一つ中華聖教總會（一九一六年創立）の初代會長であり、粉嶺軒猿祖祠の創設者でもあった。
- (16) 何廷璋「種植經濟論」「飛霞洞志」卷二、八六頁。

(17) 同右、八三一—八四頁。

(18) なお農業重視は飛霞洞に限られたものではない。たとえば香港に設立された寶霞洞の洞務規定には「庶務」「經生」などと並んで、すべての種植に關する事務を扱う「農務」という役職があった。また香港粉嶺にある藏霞精舍の信者の話によれば、戦前は農業で自活していたという。

(19) 何廷璋「養老慈善論」「飛霞洞志」卷二、八七—九一頁。

(20) 『觀音濟度本願眞經上下卷』（咸豐本）、王見川・林萬傳編『明清民間宗教經卷』第九卷、新文豐出版公司、一九九九年、四八一—五三六頁。

(21) 廣東年鑑編纂委員會編『廣東年鑑』、一九四二年、天一六七—一六八頁。

(22) 先天道には信者の修養の段階に應じて昇格する位階制度があった。最高位の「十地」（または「家長」）は一つの區（數省をまとめて一區とする）の道務を管轄する。その下は「頂航」「保恩」「天恩」「護道」と續き、「天恩」以上の位につけば弟子をとることが許された。ちなみに女性の最高位は「保恩」までとされた。（『大道』第二期、一九五七年、六頁、Topley 1963: 374、及び信徒からの聞き取り調査に基づく）。

(23) 筆者が二〇〇一年春に訪ねた銅源洞（香港新界大埔）という齋堂は、一九七一年、十數人の自梳女たちによって設立された。住持は番禺縣出身の女性（現在八三歳）で、先天道に

は番禺縣にいたるときから既に入道していたという。

(24) 萬佛堂は香港でしばらく阿媽をしていた南海縣西樵出身の女性信徒が中心となり、數人の仲間とともに設立された [Topley & Hayes 1968: 145]。

(25) 佛山における先天道系結社の活動については、元信徒の回想録である區瑞芝「佛山先天道内幕」「佛山文史資料」第九輯、一九八九年に詳しい。

(26) 梁少俊「安老院十週紀念及新宿落成開幕詞」「大道」第二期、一九五七年。

(27) 『寶霞叢錄』一九四九年、六一—七頁。

(28) 『曾漢南道長事蹟』『大道』創刊號、一九五七年、七一—二〇頁。

(29) 梅州市地方誌編纂委員會編『梅縣建築梅江橋徵信錄』（一九三四年）、一九九二年重刊本。

(30) 「南遊點滴」「大道」創刊號、二五—二六頁。

(31) 江慧光「自述」「泰國先天佛教傳玄集」一九六〇年、一一八—一三三頁。

(32) 「南洋先天佛教總會開幕紀念刊」一九六六年。同資料は游子安氏の「好意により複寫させていただいた。またタイに廣がった先天道系結社の現状については「林一九九六」に詳しい。

(33) 『泰國先天佛教傳玄集』の各堂の紹介を参照。

參考文獻

相田 洋

一九九三「金蘭會・宝巻・木魚書—中國における結婚拒否運動と民衆文藝」『柳田節子先生古希記念中國の傳統社會と家族』汲古書院。

淺井 紀

一九九〇『明清時代民間宗教結社の研究』研文出版。

志賀 市子

一九九九『近代中國のシャーマニズムと道教』勉誠出版。

武内 房司

二〇〇一「廣東省へ進出する香港道教—擴大する『香港經濟文化圈』の中で」『アジア遊學』二四號。
一九九二「清代青蓮教の救済思想—袁無欺の諸説を中心に」『中國—社會と文化』七號。

一九九四「清末清蓮教歸根門派の展開」『學習院大學東洋文化研究所調査研究報告』四一號。

一九九八「清末宗教結社と民衆運動—青蓮教劉儀順派を中心に」神奈川大學中國語科編『中國民衆史への視座』東方書店。

林 萬 傳

一九九六「泰國先天道源流暨訪問記實」『民間宗教』第二輯。

卿希泰主編

一九九五『中國道教史』第四卷。

曹 玄 思

一九九四「先天道的自梳女」馬建劍他主編『華南婚姻制度與婦女地位』廣西民族出版社。

游 子 安

一九九九「香港早期道堂概述—以先天道爲例說明」

『臺灣宗教學會通訊』第五期。

鄭煒明、黃兆漢 一九九三『香港道教』加略書房。

鄭 志 明 一九八八「晚清《玉露金鑑》寶卷研究—寶卷式齋書與清民間教團」上・下、『民俗曲藝』第五六・七八期。

Gaw, Kenneth. 1988. *Superior Servant: The Legendary Cantonese Amahs of the Far East*. Singapore: Oxford University Press.

Sankar, Andrea Patrice. 1978. *The Evolution of the Sisterhood in Traditional Chinese Society: From Village Girls' Houses to Chai T'ang in Hong Kong*. Dissertation. The University of the Michigan, 1978.

Stockard, Janice E. 1989. *Daughters in Canton Delta: Marriage Patterns and Economic Strategies in South China, 1860-1930*. Hong Kong: Hong Kong University Press.

Topley, Marjorie. 1968. "The Great Way of Former Heaven: A Group of Chinese Secret Religious Sects." *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*. 26-2.

1975. "Marriage Resistance in Rural Guangdong", in M. Wolf and R. Wike, eds., *Women*

in Chinese Society. Stanford: Stanford University Press.

1978. *The Organisation and Social Function of Chinese Women's Chai T'ang in Singapore*. Microform. London: Photographic Section, University of London.

Topley & Hayes. 1968. "Notes on Some Vegetarian Halls in Hong Kong Belonging to the Sect of Hsien-t'ien Tao: (The Way of Former Heaven)", *Journal of the Hong Kong Branch of the Royal Asiatic Society*, vol. 8.

付記…本稿が依據する資料は主として、一九九九年八月から二〇〇一年三月までの間に断続的に行ってきた香港、廣東道教の歴史と現状に關する現地調査の中から得られたものである。調査は文部科學省科學研究費補助金(獎勵研究A「九〇年代中國廣東省の宗教復興にみる傳統と創造」『グレート・香港』の形成と關連して)の助成を受けて行われた。調査に際し、お世話になったすべての方に對して感謝の意を表したい。また香港城市大學の游子安氏には、氏のご好意により、氏が収集した先天道關連の文獻を多數複寫させていただいた。ここに記して深く感謝の意を表する。